

会 議 録

内容承認	公開・ 非公開	<開催日>令和元年10月7日(月)		<傍聴人数> 0名				
藤田会長 木下副会長 杉山委員		<時 間>午前10時～12時		<傍聴室>				
	公開	<場 所> 岸和田市立産業高等学校 同窓会館 2階 会議室		岸和田市立産業高等 学校 同窓会館 2階 会議室				
<名称> 第3回岸和田市産業教育審議会								
<出席者> ◇岸和田市産業教育審議会委員 (○出席、■欠席)								
香月	北野	木下	杉山	武林	中井	中野	藤田	増谷
○	○	○	○	○	○	○	○	○
◇出席者 樋口教育長 ◇事務局 (教育委員会関係) 藤浪教育総務部長・谷学校教育部長・高井教育総務課長・倉垣学校教育課長・ 石井指導主事・田井指導主事 (産業高等学校関係) 楠戸校長、大西教頭、榎本教頭、小林産業高校学務課長								
<議題等> 1. 開会 2. 議事 (1) 社会の変化をふまえた岸和田市立産業高等学校の教育の在り方 (2) 地域の実情や生徒の多様性に対応した教育活動の在り方 (3) その他の課題 (4) 事務日程について 3. 閉会								

【藤田議長】

ここからは私が議事を進行させていただきます。

まず、本会議の署名委員として杉山委員を指名いたします。よろしくお願いいたします。

本審議会におきましては、岸和田市立産業高等学校のより良い教育環境を整備し、充実した産業教育を実現するため、委員並びに関係者の方々のご意見をいただき、審議してまいりたいと考えています。みなさん、今回もどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、議事の1つ目「社会の変化をふまえた岸和田市立産業高等学校の教育の在り方」について審議してまいります。

前回の議事録をご覧いただいたうえで、前回最後の段階で、いくつかの切口があるということで、前回の会議を閉じさせていただいたところですが、前回の会議の後に、もしお考えいただいたことがございましたら、ご意見をいただきたいと思いますがいかがでしょうか。それと同時に、中井委員からの意見書にもお目通しいただきまして進めていきたいと思っております。

ではよろしいでしょうか。資料1と資料2をお目通しいただいたと思いますので、改めて前回の会議後お考えいただいたこと、もしくは今日資料等をご覧いただいたうえで、ご意見等ございましたら、委員の皆様からいただきたいと思いますがいかがでしょうか。

【増谷委員】

高校に行っているお母さん方と「どこの高校がいいかな」という話になったときに「産業高校はどうか」と尋ねたところ、最近では進学する生徒も多いという状況を知らなくて、「産高は就職というイメージがあったけど違うのか」という話や、先日説明いただいた販売実習のような、本当に働いたらこういうことをするのだという実践的なことをさせてもらえて、「最近の産高は前とは違って良い」ということを聞いたりしました。今取り組まれていることは、一保護者として魅力的だと感じますので、今後もそのような活動を続けていただけたらいいのではないかと思います。

【藤田議長】

増谷委員から、いわゆる従来の産業高校のイメージはどちらかというと就職という状況から少しずつ変わっているということが、中学生の保護者の間でも少しずつ認知されているようだというご意見でしたが、他に関わるような内容でも構いませんし、委員の後をうけてとか、その他の意見はございませんでしょうか。

【木下委員】

高校に入るお子さんを持った保護者の方が、どういう考えをもっているか分からないので、そのあたりをもう少し聞きたいということと、高校側の先生がどういうふうに感じているのかということをお教えしてもらいたいです。今までのように、産業高校だったら入学したら就職できるというような感じで保護者の方は入学させるのか、最近の保護者の方はだんだん産業高校は進学率が上がってきて多様な選択肢、就職もあるし、専門、短大、大学と

いろいろな選択肢があるというのを求める傾向にあるのか、それは保護者の間でどうなのか、産業高校側の先生は実際に入ってきた保護者とのやり取りの中で、どういう傾向があると感じているのか教えていただきたいと思います。

【杉山委員】

昔と今の一番の違いは、特に岸和田市立ということで岸和田の生徒がほとんどのような気がします。市外の生徒で、例えば産業高校に行きたいという人がいても、岸和田市立産業という学校の説明が、市外の先生方にどうも理解をされていないのではないかと思います。以前は、中学の先生方がいろんな学力も踏まえてですが、運動するのであれば産業高校という先生が昔は多かったです。しかし、最近、産業高校はちょっとレベルが上がり、界限にある私立高校を先生方が推薦するような傾向を感じます。もちろん受験制度もあると思いますが、そういうなかで産業高校というのは、岸和田市の生徒が行く学校であるというイメージを持った中学校の先生方が多いような気がします。もちろんそういう意味では、各学校の先生方にいろんなPRや説明をされていると思いますが、市外の中学校の先生方に産業高校を勧めてもらえないというような傾向をここ何年間かで、いろんな方から聞いたことがあります。今はインターネットの動画が進んでいるものですから、例えば、産業高校のデザインシステム科の生徒たちがいろんなものを発揮し動画でPRすることや、行事・文化祭・体育祭などの動画を見ただけでもわくわくするぐらいの他校にはない立派なプログラムがたくさんあるわけです。そういう意味では、生徒たちがのびのびとした、あるいは生徒たちの考えをもとにしたアイデアで活動をされているという、素晴らしい学校であるということをもっとPRしてほしいと思います。

【藤田議長】

中井委員から、資料2の意見書について補足で説明いただければと思いますが、よろしいでしょうか。

【中井委員】

前回の時に学校から提案もございましたけれども、私どもの感覚としては、3年間の高校生活の間に一生涯の基本的な学力といいますか、どのような時にでも対応できる力を備えてもらいたいと、また、その力が卒業してからのいろんな応用力に効いていくという具合に考えています。この根源的なところで、商業科につきましては、やはり関空のお膝元というのは偶然のことですけれども、今後やはり輸出入のエキスパートであるとか、あるいは語学のエキスパートであるとか、今後20年30年先のことを考えて、少しこういう部分に特化した部分も大切ではないかと考えております。それが資料の6と7に書いてある部分でございます。以前もございましたけれども産業教育の振興につきましては、やはり財政基盤の安定化が1番だと思います。京都で十数億円の教育界の基金を抛出して、2つの学校を1つにまとめたという事例もございますが、岸和田の産業界ではとてもそういうことはできませんが、それでもやはり教育につきまして、きちっとした財政基

盤を作っていくことで、教職員あるいは生徒に対しての、いろんな可能性を作っていくことができると考えております。振興会など、どんな形や名前は何でも構いませんが、産業界も含めて教育の現場でお金についてあまり困らないような考え方をしながら、想定するのは寄付とかそういうことを考えているのですが、そういうことを考えているということが1つでございます。それと最後にありますけれども、ご卒業の方には非常に申し訳というか、あんまり言うと怒られるかもしれませんが、名前を少し、岸和田実業高等学校とか、いちばん想定していたのは早稲田実業を想定していました。早稲田実業は実際には普通科ですけれども、そういうようなことを1つできないかということを考えて、意見書を出させていただきました。

【藤田議長】

ありがとうございました。ではまた中井委員のご説明を受けまして、その他ご意見等ございませんでしょうか。

【武林委員】

校長先生にお聞きしたいのですが、先ほどお話がありました岸和田市出身の生徒は、大体半分ですか。

【楠戸校長】

はい、当然、学科によって差はありますが、全体から見れば5割から6割かというところだと思います。

【武林委員】

大体の推移はここ十年は変わっていませんね。

【楠戸校長】

そうですね。あまり大きくは変わっていません。

【武林委員】

市外の方もそれぐらい入って、あまり変わってないのですね。私は今、私学におりますので、泉南地区の各中学校をまわらせていただいています。そうすると、地元志向というのがやはり強い地域です。地元の公立高校に入れるのだったらそこに行きたいという生徒が多いです。だから高等学校も、その人たちが希望するコースであるとか、学科であるとか、これを作り出す努力とかしているわけですが、全般的に地元志向だと思います。中学校の生徒や先生方に聞きますと、やはり希望する学科や希望するコースがあるか、それとやはり進学実績とか進学指導がきちんとした実績を持っているか、基礎学力がつくか、それでその基礎学力がつくとその教科を好きにさせてくれる、それから学校の校舎、それから全体の雰囲気子どもたちにとっては選択する非常に強い動機だと思います。

ます。こういうところを目指すということが重要になってくると思います。科の名前ということもありますが、東京の方では商業科をビジネス科というふうに変えるというようなことをおっしゃっております。普通科の高校も改編があって、考えておられるのはアスリート科、サイエンステクノロジー科、こういう学科を考えておられるということです。前回の審議会の時に意見を述べさせていただきましたが、中井委員が意見書に出されております内容に近い意見ですが、具体的に挙げられておりますので、これをベースにいろいろと選択肢をもっていかれたらどうかと思っております。例えば、商業科というのを会計科というような形に独立して、大きな大学科としては商業ということになるわけですが、その中で商業科というのを会計の方の6番商業科というのを会計科というふうにして、7番の国際科というのをグローバルビジネス科とか、名前だけではないと思いますが、その中に例えば7時間授業を設定するとか、会計科の中でコースを進学コースというようなコースを作る、それからアスリートコースは例えば6時間目以降はアスリートコースが部活動に持っていくとか、進学の方の子たちは7時間目8時間目を作るとか、そういうコースを科ごとに作っていかれたらどうかということを思ったりしています。意見がまとまっておりませんが、デザインの方も4分野に分かれて、以前はテキスト系とプロダクト系の2つだったのが4つに改編されておりますし、情報科の方はこの形で、例えばeスポーツのようなどころにもっていかれるのかとか、情報分析とかいうことができないかと思えます。問題は商業科の4クラスが大体この4、5年の間に第一次で定員割れしていることです。情報科を希望している第二希望の子が商業科ですので、これで定員割れということは起こっていないわけですが、だから商業科4クラスを中井委員がおっしゃっているようなこういう学科等を作り上げていって、その中になおかつコースというような方法ができないかと思えます。そうすると7限目8限目の授業は非常勤講師の方に任せるとか、予備校の先生の方を呼んできて特化していくなど、そういう方法も考えていかれてはどうかと思っております。

【藤田議長】

ありがとうございます。他に一通りご意見をうかがってから学校側から少しお考え等伺いたいと思っておりますが、他にどうでしょうか。

【中野委員】

今年の2月だったと思いますが、経団連が大学に対して提言をされております。大学の4年間で身に付けることをしっかり身につけてから社会に出してくださいというものです。それと同じように高校に当てはめると、高校時代に当然身に付けることは身につけて、社会なり大学に送り出してくださいということだと思います。そして今、普通科の改革を言われています。その理由は、私は軸足が専門学科におりますので、専門教科に軸足を置いているのでこういう考えになるわけですがけれども、大学の就職した学生の離職率が4割に達していると、そして高校の場合、全国的に見ると大体40%くらいが離職率です。そしてその中で、普通科と専門科を比べてみた時に、専門科は工業校長協会の悉皆調査で

いきますと、近畿の場合 20%を切ります。という事はやはり専門教科を勉強することによって職業意識が強くなって、例えば企業選びでも、選び方が違うのではないかと思います。要するに自分が学んだものを生かせるような仕事を探しているのではないかと、そういう事を実は感じているわけでございます。それで進学、社会はとにかく進学と言うわけですが、進学して大学を出ても 4割の離職率が出ているということを考えた時に、やはり自分は高校卒業後、大学卒業後、一体どういう社会人になるのか、どういう社会参加をしていくのかということ、やはりはっきりと少しずつでもたえず働きかけて、そしてその中で自分の気持ちとして実はこういうことをやりたいのだということ、生徒自ら気持ちが出てきたときに、初めてそこで次のステップが踏めると思います。ですから、そういうようなことを高校でも進路指導面ですか、そういう面を充実させていかなければいけないという気もするわけです。それと大学進学で考える場合、産業高校で学んで大学進学をどう勝ち取るかということでございます。私は都島工業で昭和 63 年から、その当時の校長が将来を見据えた時には少子化は目に見えているからということで、その時に私は教務にいたのですが、これから少子化に備えてどうするかということ、そして普通高校と入試では時間数の関係で勝負はとってできません。そしてどういうふうにしていくかと、しかし入ってからでも英語の力がない、数学の力もない、物理の力もないということではダメだろうということで、とりあえず 2 年生と 3 年生に、武林委員がおっしゃいましたけれども、コース制ということで英数コースというものを、専門教科との取り合いがありますのでなかなか週の限られた時間では普通教科と専門教科の取り合いになるわけですが、しかし、そこでなんとかしなければならぬということで、2 年生で英語 2 時間、数学 2 時間、3 年生でも英語 2 時間、数学 2 時間、そして課題研究という時間も 3 年生では活かして力を付けようということ、それからもう一つは大学に入る方法は一般入試だけではないだろうということで、例えば指定校推薦、推薦入学、あるいは国公立大学をどうしていくかということ、そして、当時はインターネットもあまり普及していませんでしたので、参考になる本をずっと読んでやっていたが、そういうことから考えると、大学との連携というのはつまりどういう生徒を育てるのかということ、3 年 + 4 年の 7 年で社会人になるというひとつのコースもあればいい、そして高校 3 年生で社会に出るというコースあればいい、それは本人の気持ちです。大学在学中に大学の 1 年生 2 年生で起業家になった人もいます。ということは、高校の力がついたら、それだけの発想力が出てきたらいいと思っています。そしてもう一つ気になるのは AI 化です。AI 化が進むとこういう仕事がなくなると言われています。例えば税理士も中に入っていました。そうすると一般社会から見ると、科の名前ですがけれども、科の名前もこれからの時代の変化とともに、どういう方に向いていくかということで、例えば京都の堀川高校は、自然探求科という名前でやっています。京都市は京都府に比べると規模的に市だけですから、中井委員がおっしゃったように洛陽と伏見が一緒になって京都工学院という高校になりました。そしてその洛陽の卒業生が日本電産社長だからという繋がりがあって、堀川高校にしても西京高校にしても成功しています。それは学校数が少ないからです。そうすると産業高校の場合は本当に同じような形

で、岸和田市の光る高校になると思っています。ですから、学科名とかを変えるのは将来のAI化が進んだときに、職業はどう変わっていくのかということと、進学する場合に大学と連携して7年で社会人になるということ、それから大学に入る1つの方法として一般入試以外にもう少し入る方法はないのかという研究をしていただけたらいいかと思っています。

【藤田議長】

ありがとうございます、他にいかがでしょうか。その辺りでまず学校から、今まで出た意見から何かあればお願いします。

【楠戸校長】

今お聞きした内容で、全てお答えできるわけではないですが、武林委員から頂いたご質問で、先ほど市内の中学生が5割から6割とお答えはさせていただきましたが、潜在的な希望者はもっと多いと思います。ただ先ほど成績がということで、本校を諦めて他校に行かれるという方もやはりときどき耳にしますので、そういう影響もあるのではないかと、うふうには考えております。それから入学後の保護者の進路意識についてですけれども、専門高校としてよく中学生の保護者の方にPRするのは、「本校の場合は、推薦入試においても検定を取得したりということで、進学するにしても就職するにしても、高校入学してから高校3年まで、まだ2年間考える時間あります」というようなお話をさせていただいております。ただ当然「日頃の学習であったり、取得であったりというのは進学・就職に関わらず、最終どちらになるにしてもしっかり勉強しなければなりません」という話はしますけれども、例えば2年生の後半になって、もともと就職と思っていた生徒が進学を目指す、当然その逆もございますけれども、そういう両方に対応できるということが1つの特色になると考えております。保護者の方には、入学して高校1年生の段階から、進路指導に関する保護者説明会を実施しております。保護者の中には「入学したばかりなのに…」というような話もありますが、今年は来週に1年生の保護者の方を対象として説明会を行いまして、今年の進路状況であるとか、昨今の進路状況であるとかを説明させていただいて、学校と保護者それからお子様三位一体となって、3年間をかけてしっかりと考えてもらいます。要は、高校3年生になって急に決めることによるミスマッチにつながることはないよということ、これは本校の昔からの伝統でありますけれども、そういうような形で1年生の時点から、保護者の方にも説明させていただいて、じっくり考えていただいております。そしてその中で、もともと就職だったものが進学になったりとか、進学だったものが就職になったりということも当然ございます。それからAI化というお話が今出ておりましたが、確かにこれからAIが進んでいこうと、そして今はグローバルということであるところまで話が出ておりますけれども、AIが進むと日本人は日本語で話せば翻訳機が英語にしてくれる、あるいはベトナム語にしてくれる、中国語にしてくれるというような時代になるのではないかなと思います。逆に言いますと、新学習指導要領が目指す深い学び、考える力が若者に求められてくる時代になるのではないかと。

それから前回商品開発クラブでお話しさせていただきましたが、商品というのは広い意味で全てが商品なのです。プレゼンテーションした内容だけではなく、例えば、旅行の企画も商品といたしますし、保険商品といたしますし、世の中にはいろんな商品が溢れています。だから相当広い意味での商品開発だと思っております。それから、商品を開発するためには地域の歴史や特性を勉強しなければなりません。今のインバウンドの状態から言いますと、当然、国外から来られた方にも買っていただける商品を考えようとする、それぞれの国の習慣・文化ということも勉強の枠に入ってくるかと思えます。そういう意味で言いますと、商品開発という、一つの中心としたものですが、これからの新学習指導要領に沿った、広く深く考える力が必要となる学びになってくるのではないかと思います。そういうことも踏まえて、前回ご紹介させていただいたつもりでございます。あと、当然国際科も大事だと思えますし、入試に関しても、例えば国際科、国際ビジネス科といたしますが、この9地区、昔の9学区にはやはり和泉高校さんがグローバル科、それから佐野高校さんが国際教養科を持っておられますので、そこでの差別化も当然必要になってくるだろうと思えます。今から国際科に焦点を当ててもなかなか本校が厳しい状況になるのではないかと思います。何か特色をつけた国際科、グローバル科でないとうまくいかないのではないかと感じております。

【中井委員】

今、校長先生がおっしゃった商品開発のことですけれども、実際に何十年と商品開発も含めていろんなことをやっております。その時に一番壁にぶち当たるのは基礎力の問題です。基礎力がないと商品開発もできません。反論するつもりはありませんが、英語の問題もそうですけど、英語で機械翻訳ができるのではないかと、だけれども語学教育はそのプロセスで人間の物の考え方を変えていくという大前提があると思えます。だからペラペラと喋るという意味ではなく、考え方を考えていくという意味で語学教育は大事だと思えます。だから何も英語だけを喋るというものではないと考えます。商品開発もそうございまして、そういう中身をもちませんと、例えば商品開発するのに、実は何が売れるか売れないかについてゲーム理論を含めて、いろんな数学的な基本が要ります。そういう数学的な基本をマスターしておりませんと、何がどのようになるかということが実は分析できないのです。だから実体として、例えばお店をつくるのかするというのは分かります。ただ、そればかりやっておりますと、10年20年その子が後までもつのかどうか、それだけで終わってしまうのがいいのかどうなのか、ただ中野委員がおっしゃられたように、特定のことをやることによって、その部分から離れないということも分かります。実際、私の会社でもそうですけれども、たくさん若い人がきて結構離職します。何年かに一回の割合でずっと動いている人間もたくさんおります。だからそういう人たちを含めて、どこまで職業として定着していくことができるかどうかということ、やはり基本的なものを育ててほしいというのが今回出させていただいた大きな理由の1つです。決して、具体的にやることについて否定はしません。ただ先生がおっしゃっていた、例えばいろんな手法ですが、実はあの手法は50年前にサラリーマンをやっていた時のお話なのです。だからもっと前

へ進んでいます。それはかなり数学的なものも含めて進んでいますので、基本的な力をつけてやりたいという具合に思います。それからもう一つ、国際科の話がありましたけれども、近隣でやられているところもあるので、いろいろとあると思いますけれども、実は想定しておりましたのは、貿易の輸出入の仕方というのがございまして、それに対して、いろんな証明なり何なり商工会議所の産地証明とかを出したりしております。そういう特殊な輸出入関係の職業もございまして。それから、日商簿記1級を取りますと税理士を含めた受験資格ができるとか、要するに後天的になれるものはたくさんあると思いますので、そういうものをうまく入れながら、なおかつ生徒の特性を、3年・4年の考え方もいいと思います。それから武林委員がおっしゃったように、6時間7時間という考え方、実はこれはもうひとつ、泉州高校が近大付属になりまして、時間数と出てくる日数は非常に厳しなか、成功なさいました。今は進学校として進出しつつあります。これは進学校になると自身がいいとは思っておりません。その人の特性、その人のものの考え方、力の出し方がたくさんあると思いますので、さきほどの大学1年2年で起業する人も出てくる、そういう時代です。だからそういう時代に沿ったような教育あるいは基礎力をつけてやりたいと思っております。その人が、人生を全うするまでの間で力になるというふうに考えておりますので、学力の問題とか分からないわけではないですけれども、特化することによってその特色を出してやるとか、生きるための力をつけてやるとか、そういうのを見つけてほしいとも思っております。私も個人的なバス会社を経営しております。出てくる運転手は皆大体、中卒です。要するに高校中退が多いです。そういう人が職業的にこれではだめだということになって、大型2種の免許を取って、自分の人生を立て直しています。人にはいろんな特性がありますから、学校教育だけが全てではないと思っておりますけれども、そういう人のためにも基礎教育だけはきちんとつけていただきたいと考えております。

【藤田議長】

ありがとうございます。他にご意見等ございませぬでしょうか。ここまでのお話を伺っておりますと、基本的に学科を分ける分けないなどいくつかあると思うのですが、分けるにしてもその中にコースを設けて、いわゆる生徒の自己個性に適った教育をしていくと、その子の生きる力を育むとか、昨今求められる教育の方針でございませぬけれども、そういうことを叶えるべく、ある種、細かく分けるといっても出てくるかと思ひますけれども、こういった方向で議論を進めていくといったことが多いような気がいたしますが、そういったことで次の議題のほうに移らせていただけてよろしいでしょうか。それでは議事の2つ目に移らせていただきます。地域の実情や生徒の多様性に対応した教育活動のあり方についてということで進めてまいります。ここまでの議論を踏まえますと、おおよそこういった部分の内容がほぼ出てきているかと思ひますが、ただし地域の実情でありますとか、生徒の多様性という部分に関しましては、もう少し生徒像でありますとか、地域像であるとか学校の実情というところに関して、もう少し考えを議論して、考えを深めていく必要がございませぬので、そういう点を踏まえてご意見等をいただければと思ひますが、まず保護

者の方からのご意見等ありましたら、北野委員いかがでしょうか。

【北野委員】

就職、進学どちらでも選択することができると思っています。校長先生もおっしゃっていたように、進学のつもりで来たけれど就職する、就職のつもりで来たけれど進学する、子どもが産業高校を卒業したので、他の高校と比較することはできないですけれども、就職に関してもきちんと指導なさっています。面接に対しての礼の仕方から、細かいそういうところに関してはすごいと思っています、他の高校では多分そこまでやっていないと思います。進学が当たり前って時代になってしまって、昔であれば進学しないだろうというような学校でも大学に行きます。そういうところも進学、進学とどこの高校もシフトしているの、割と就職ということに目をかけないというか、他の進学校に行ったお母さんに聞くと、高校出たら就職させるつもりですと学校の先生に言ったら、就職は面倒見ないので自分で職業安定所に行って探してきてください、というようなことを言われたみたいで、えらいところに入ってしまったと言っていました。まだまだ私たちの頃は、岸和田高校といっても高校出てから就職なさる方もたくさんいました。それが今は進学のみで、就職ということに関しては全く指導されていないというところが実情だと思います。岸和田高校や佐野高校に行かせたお母さんもそういうことを言っていました。その先どうしたのか分からないですが、就職に関しては全くなく、学校での指導も進学に関してのみの説明なのです。産業高校は、保護者に対しても、就職・進学両方に対して説明してくださるので、そういうところがすごくとてもいい学校だと思っています。

【杉山委員】

今の意見には大賛成です。やはり昨今、とにかくここでできれば進学して欲しいという親御さんが多いわけですがけれども、特に就職するのにどうしたらいいのかとなれば、産業高校というのは、就職をお願いできる学校としては非常に特色のある先生方の就職指導というか、あるいは、いろんな企業に先生方が回っていただいて産業高校の就職率は100%というところもよく聞きますし、そういう意味では北野委員さんが言われたように産業航行の特色としてはやはり、いろんな科も大事かもしれませんが、就職を最優先に考えるという意見も必ず残す必要があるのではないかと思います。

【増谷委員】

私も保護者として進学について、どうしていったらいいのかを考えた時に、進学や勉強に熱心な保護者の方と、関心がないとおっしゃる方に別れてしまい、その間の方が結構少ないと思います。今おっしゃったように、進学のある方がいいと思ったりするのですが、先ほどから伺っていると、産業高校は両方あるということで、とても素晴らしいと思います。ただ、そういうことがあまり保護者の方には入ってきません。これからどうしようという話になったときに、他の学校のことですけれども、久米田高校はダンスがあるからダンスをやっているのであればいいのではないかと、やはり特色のある学校とダンスが有名

になっているからダンスでいけるとか、やっぱりどうしても産業高校ってあまりイメージがないというか、文化祭は中学生とかも入ってこられるのでしょうか。学校の中の生徒だけでしょうか。高校の文化祭とかで私立であれば一般開放もしていて、連れて行ったらこんな学校なのか、こんな生徒さんが入っているのかとか、名前で聞いたり情報として知っているよりも、通っている生徒さんを見て学校に行きたいとか、こういうこともやっているんだということを実際に見てみたら、そこに行く気になったりするのです、やっぱりイメージと聞く情報だけでは違うので、できたらいろんな問題があると思いますが、文化祭とかを親とかにもアピールしてもらえたら親としても分かりやすいと思います。

【楠戸校長】

今のご質問の答えになろうかと思いますが、本校の文化祭は昔から土曜日開催ということで休みの日に実施しているのですが、毎年1,000名を超える方が入場されて、キャパシティーがいっぱいの状況です。逆に言うとどこかで事故が起こらないかと若干心配もあるぐらい賑わっているところです。最近では、それでも本校を希望する中学生、中学3年生には本校の文化祭の様子を参考に見て欲しいということで、現在堺市以南の中学校にご案内を送らせていただいて、「本校に入学を希望される中学3年生に関しましては、本人が希望すれば招待させていただきます」というご案内も送付済みでございます。

【増谷委員】

やはり中学3年生の方が対象でしょうか。

【楠戸校長】

やはりあまり多く来られると、入場制限もしなければならぬという状況にもなりますので、一応中学3年生という形でさせていただいております。

【増谷委員】

子どもは1年生なのですが、やっぱり3年生から頑張ったとしても間に合わないということがあるので、そこを目指そうと思ったらもう少し日頃から勉強しなければいけないということが言えるのにとおもいます。

【楠戸校長】

ご意見は承っておきたいと思います。

【杉山委員】

その文化祭、体育大会を見ると生徒が一変に変わるすごい学校だということが分かると思います。

【藤田議長】

他にご意見何かございませんでしょうか。大学側から見たときにというところですけども、この近隣で見ますと産業高校と佐野工科高校とが大きな実業高校で、実業高校は従来、就職というところに特化してきたと思いますが、進学実績が上がっているというのは全国的にもそうですが、その中である意味では特定のスキルというのを持った強みという部分の進学のあり方というのがあると思います。一方で、先ほどご意見が出ていたと思いますが、普通科の方が特にこういう言い方が正しくはないのですが、偏差値的に厳しい状況に置かれてきていると、選択肢としての進学というカードもなかなか切れないという状態のなかで、かなり予想ができるわけですけども、そういう意味では産業高校にしても、佐野工科高校にしてもある意味ではいちばんいいポジションにあるのかもしれないと思います。成績的にもあとは何か特化した力を持つという面において一番いいポジションになると思います。なのでそういう意味では、そのあたりの力を生かして、内容を組み立てるといふ事が重要だと思います。ただ一方で、語学の立場でいいますとやはり基礎学力というのがどうしても、もう一方で専門高校、実業高校から受け入れるときに大きなネックというのがありまして、やはり基礎学力がどうしても普通科高校から来れば、専門科目で得られる時間数が多い分だけ、基礎学力の定着が普通科の学生さんよりは心もとない部分があると、なのでそういう部分についてどう克服できるのか、まさに0限、7限対応なのか、そういう部分を含めて考えていただけると、またその幅や選択肢が広がってくるのかなと思います、そのあたりは木下委員どうでしょうか。

【木下委員】

私が今いる大学というのは、学力レベルに関しても多様な学生がいて、できる子とできない子の差が激しく、基礎学力のない子が大半を占めているという感じです。高校で入試形式の問題というのがあると思うのですが、一般入試で入ってこられる学生さんというのは一定基準をクリアしているというのがあるのですが、うちの大学の場合は地方ということもありますので、どうしても学生を集めたいというのがあるので、結構AO入試というので、面接をして専願ということでも来てもらおうと、それで人を集めているところがあって、学内から評定が上がってきますけれども、その学内の評定とその面接の2回、20分ずつするのですが、それで決定して入ってもらおうということがあるので、なかなかその高校の中でどれくらい基礎教育をやられてきたのかというのは、もう少ししっかりやっておいてもらわないと大学は専門科目が多くて、授業でコミュニケーションできなかったり、伝わらなかったりということが多発しているというような状況で、高校教育でやっぱり基礎教育をしっかりして欲しいという事を私は大学側として切実に思っております。

【藤田議長】

その点は本学も同じで、経済学部にあっても数学がという学生が多くいるといえます、かなりの割合を占めています。そういう意味でも高校だけに責任があるというわけではなく、むしろ初等中等教育全般に渡ってというところだと思いますが、初等中等教育の

段階から基礎学力の定着をおろそかにしてきてしまうと、それが最後に大学ですべて解決できるというわけではないので、まずなんとかその部分をできないかと思います。中井委員がおっしゃいましたが、まさに後の応用という部分で、それは別に大学だけではなくて社会に出てからでも応用がきいてきますので、その辺をどう工夫していけるのかということかと思いますが、他に何かございませんか。

【香月委員】

学力の話が出たところですがけれども、府立高校の実業高校のところでも、同じく基礎学力は、3校ほど進学センターを設けてしているところでもありますけれども、進学センターに限らずやはり、特に、校長先生方からお話をお伺いするときには、特に数学と英語です。特に数学の方は高校の入学時の段階で、かなり入学生の中で学力の差がその時点についていると、おそらくそのまま置いておくと、3年間でもっと広がりますし、先ほど大学の先生からの話にもありましたが、大学入学時も開いているという状況になっているというところで、一方で0限目7限目という発想も、当然府立高校の中でもあるわけですがけれども、やはり実習のこととか、主体的・対話的で深い学び、この深い学びをするときにやはり一定の時間の確保は必要ですし、そういう学びをするときには、どうしても主体性というか、講義型で受け身的な授業よりも生徒が課題を見つけて、それを解決していこうという姿勢、素養、またそれを育てようとする教育環境を、教員のほうも今、生徒の様子を見ながら作り上げつつあるということが正直なところかなというふうには思っております。そういう中で、ここ数年というか、もう少し長いスパンで、やはり英語と数学を中心に、基礎学力について少人数展開の授業をしているというところが府立高校では多いと、1クラス40人を2つに分ける、あるいは2クラスを3展開、3つに分けて、生徒の学力あるいは進路目標に応じて設定をすると、やはりこれは結構成果が上がっているというふうに思っております。なかなか数学、英語もそうですけれども、苦手な生徒は、中学校の学び直しのところからスタートしますし、得意な子はさらに先という所もあります。ただ、そういうふうにしていくともっと広がるのではないかと懸念されている所は当初ありましたけれども、生徒の苦手意識が薄れていったときの、彼ら彼女の伸びというのはすごいなと思います。やはりその伸び、刺激というのが、得意な生徒も同じ教室で受けていて生徒同士ですからなんとなく誰がどの教科を得意というのが分かっているわけで、間近に同級生のその変化を見た時の、逆にその刺激によって得意な子がさらにまた力を発揮すると、非常に良い流れができていますので、時間数ということもありますけれども、中の部分をどうしていくかということも1つの視点として大事だというふうに思っております。

【藤田議長】

ありがとうございます。特に教育活動のあり方という部分にあっては、なんとなく方向性というのは先ほどから出てきているという気がいたしますが、地域の実情という部分で何か補足的な意見がございましたらいただけますでしょうか。学校の方から生徒の実情という部分で、何か補足するような情報がございましたらお願いします。

【大西教頭】

入ってくる生徒を見ておりました、先ほどから入試のレベルの話が出ておりますけれども、本校のレベルが高くなったというようなお話がお伺いできたのかなと思うのですが、実際に授業に私は、去年まで携わっていましたが、入ってくる生徒の学力面でのレベルが変わったという意識はございません。むしろ入試の制度のこともあるのですが、差ができているというあたりは、授業していて感じるところでございます。かなりレベルの高い生徒もいれば、ちょっと基礎学力が課題という生徒もおりますので、その辺をどのようにしていくのかというところが、私ども教員の課題となっているのかなと感じております。ただやはり本校を目指して入ってきてくれた生徒たちは、目的意識を持って入ってきてくれる生徒が多いというのは、昔から同じなのかなというふうに感じております。検定資格を1つの目標として、あるいは部活動を1つの目標として入ってくる生徒が非常に多いので、その辺でしっかりと取り組んでくれている生徒は非常に多いと感じております。入ってきた時から3年後の出ていくときのことを考えて、過ごしてくださいということを、1年生の時から、私どもも口を酸っぱくして生徒には話をしているのですが、そのあたりは生徒たちもしっかりと受け止めてくれていると感じております。いろんな分野に、中学まではあまり積極的にはできなかったけれども、高校に入って周りの生徒たちも頑張っている姿を見て、自分もということでもしっかりと取り組んでくれている生徒も多いように思います。卒業後の進路につきましても、就職に関しましては古く伝統もございまして、それこそ佐野工科高校と本校がやはりこの南地区ではだんとつの実績を持っております。指導方法につきましても手前味噌ですけれども、自負しているところです。自信を持って就職に関しては、他校さんに負けない指導をしていると考えております。進学につきましても、かなり手をかけて指導しているというふうに、これも手前味噌ですけれども先生方が頑張って指導して頂いているのかなと思います。進学方法につきましても、一般ではなく推薦でということで、専門学科推薦、資格推薦、指定校推薦、AO推薦、その辺を中心に早くから取り組ませるように指導をしておりますし、実際に3年生になったら進路指導部や担任を中心に手取り足取りそれこそ志願書の書き方から一緒にやっているという状況でございますので、その辺が生徒もうちの学校に入って、そこまでやってくれるかという感想を述べて卒業していただいているのかなという風に思っております。進学した先でも、就職のほうもそうですけれども、進学した大学、短大さんのお話を伺う機会がございました時に、やはり先ほどから出ております基礎学力という部分につきましても、なかなか厳しい部分があるということはお指摘を受けておりますので、そのあたりも手をかけていかなければいけないと思っておりますが、それ以外の個人の目的意識であったり、取り組む姿勢であったり、チャレンジ精神というものに関しましては、高校3年間で指導していた成果が出ているのか、大学に入ってからやはり実業高校を出てきている生徒の方が、しっかりと目的を持って大学でも過ごしてくれる子が多いというふうにはお話を伺っておりますので、進学するにしても就職するにしても、出た先で、入れたところでもしっかりと引き続き頑張っていたらいいような指導をさせていただくべく、全教員で取り組んでいるつもりでございます。授業とかにしますと、深い学びとかアクティブラーニングと言われていま

すけれども、その辺もなかなか積極的に前に出て、あるいは自分から課題とか目標を見つけてという子が少なかったのですが、根気よく教員がそういう指導を続けておられますと、そういう生徒も増えてきていて、そういう生徒を見ると他の生徒も刺激を受けてというところで、頑張っている生徒も多くなってきているのかなというふうに感じております。以上でございます。

【榎本教頭】

定時制の状況ですが、小学校・中学校で学校に行けていなくて、全日制の高校には進学できないということで入ってくる生徒たち、それから全日制の高校にいたけれども、そこで挫折して、1年間、他の高校で過ごした後に、定時制でやり直すという形で入ってくる生徒、この2種類の生徒がほとんどです。その生徒たちですが、この5年間でずいぶん様子も変わってきました。まず、生徒の数が減ってきています。5年前は150人程度の在籍がありました。現在は80名程度ということで、約半数まで減ってきています。ただ、生徒の出席率であるとか、授業に取り組む姿勢等は、ずいぶんよくなってきたのかなと感じており、退学する生徒も今年度は4月から3名ということで、定時制高校で定着していると感じております。生徒の数自体が少ないので、進学とか就職はその時の生徒によって変わりますが、大学を希望する生徒も現在いますし、それから専門学校、就職と色々なタイプの生徒がいます。その中で近年、情報系、コンピュータ系について興味を持っている生徒が非常に増えてきたと感じています。きっかけはゲームかもわかりませんが、コンピュータに興味を持ち、その方面への進学を希望する生徒が増えてきたと感じています。先ほどのeスポーツのお話ですが、現在茨城県で国体が行われていますが、この土日にeスポーツの大阪代表として本校の定時制の生徒が出場したということも聞いております。

【武林委員】

0時間目などの形で、小学校の頃からの算数、国語・漢字についての学習活動は引き続きやっておられるのですか。定着していますか。

【榎本教頭】

そうです。かつては当初出席していても、次第に出席できなくなる生徒も多かったのですが、これは普通の授業の出席のこととも関連しますが、欠席は非常に少ないです。1限目の前に0限目という時間を設けており、毎日25分間この時間を使いまして、小学校からの算数、漢字を内容とする基礎学力講座を1年生対象に設けております。もちろん単位認定しますが、それで1年間頑張っただけの基礎学力の不足というのを埋めようというのを、長年続けております。

【武林委員】

やはり退学する生徒も少なくなってくるのだと思います。日新が閉課程にするのです

か。府立もあちこちでしたわけですがけれども、岸和田市立産業高校は元々が定時制からの学校ですので、あちこちで無くなっていますけれども、うちが引き続いて頑張っておられるというのは嬉しいことでございます。

【杉山委員】

最近の進学率というのを、ずっと前回も今回も話題が多かったと思いますが、同窓会の方達の話では、私自身もそうですけれども、まず岸和田市でない限り岸和田産業高校というのをはっきり言って知りませんでした。なぜ知ったかという、私事になりますけれど、両親が倒れとにかく大学はいけないと、それだったら就職になるけれどもというようなことから、中学校の先生からスポーツもできる、就職も必ずできる産業高校というのがあることを教えてもらい、学校がどこにあるのかも分からず、田んぼ道をずっと歩いて願書を出しに来たことがあります。要は、産業高校は今言われたように、数少ない就職が必ず出来る学校、これが一番の産業高校のメリットではないのかと思います。だから進学も大事ですけれども、僕自身もたまたま機会があつて大学へ行きました。ただし、高校に入ったときには大学は夢にも思っておりませんでした。とにかく高校を出て、親のために働こう、学生時代とにかく好きな運動をしよう、とにかくこれだけでこの学校を選ばせていただいたわけです。同窓会でいろいろな方からと聞くと、みなさん大学までは考えていなかったと、とにかく就職できる学校ということで先生に紹介してもらったということが結構多いです。でも、学校に入って一年経ち、二年経ち、今言われたように就職と思って進学もあるでしょう。進学と思っても就職もあるでしょう、要は一番のポイントは、就職が必ずできるというのが岸和田産業高校のはずだったのです。自分が努力して有名な大学に行かれる生徒さんも毎年いると思います。だから就職もできる、努力すれば大学もいけるというのを、産業高校の一番のメリットだというのをアピールして、理解してもらおうというのが大事だと思います。

【藤田議長】

ありがとうございます。やはり進学にしても、就職にしても、両方の需要にきちんと対応できる仕組み、そして内容というふうに、そこの部分に関して今後また検討していくということになろうかと思います。そして併せてですけれども、杉山委員からご発言があつたとおりですが、就職ができるということである一方で、杉山委員のご経歴にもあるところですが、就職した後にさらに進学する可能性というのもあり得るわけですし、現状なかなか経済的にすぐ進学というのが厳しい経済的な生徒さんも増えてきていると言われていたところですが、そういった子が、後に進学できる余地というものをなんとか確保できるだけの、基礎学力の部分の確保ということも、もう一方でその子の将来を考えたときのひとつの対応として、ぜひ検討するべきと私個人としても思うところでして、そういった形で次の審議会の時に意見をまとめていきたいと思っております。では議事の3つ目として、その他の所ではありますが、ここで本来中井委員の意見書ということで、ご意見を伺うところでしたけれど、先ほどお伺いしておりますので、その他特に何か用意して

いるものはありませんが、出席している委員の方からご意見等ございましたら、お願いします。学校側から補足するようなことがございましたら。

【楠戸校長】

特にありません。

【武林委員】

誰に質問したらいいのか分かりませんが、大阪市立が大阪府立になるような事を聞きたいと思います。そうすると岸和田市立はどうなるのか、東大阪市立はどうなるのでしょうか。今、岸和田市立産業高等学校が今後どのように発展させていこうかというようなことでやっておりますけれども、これが府立になると内容が全く変わってきます。その辺りはどんなふうになるのでしょうか。

【樋口教育長】

事務局ではございませんけれども、9月2日の新聞に記載されておりますけれども、大阪の市立高校を22年度府立に移管という見出しで動いていくという記事が載っております。方針は大阪市教委、府教委の両方で方針を固めたということですが、まだまだそれまでの期間に調整するということがあるという記載ですので、私たち岸和田市はどちらかという外から見ているというような形になっていると思います。またこの移管が現実であれば、今委員がおっしゃったように、東大阪の日新と岸和田市の産業高等学校がそれぞれ各2市の特色ある高校として残るということになるわけです。ただ、現状では新聞紙上に書いてはおりますけれども、大阪市と大阪府というような記事がございますので、まだ岸和田市がどうのというような事は考えておりませんし、今、審議会ではこのような形で諮問をさせていただいておりますので、諮問内容に限っての内容を吟味させていただいて、あるべき産業高校のこれからの輝く学校としてのご意見を協議していただければと思っておりますので、宜しくお願い致します。

【藤田議長】

いわゆる府市統合の文脈だと思いますので、それがまた大阪都というようなことになるとまた話が変わってくるかと思っておりますけれども、その辺の文脈だと思います。

【中野委員】

現在、商業4、情報2、デザインシステム1と、計一学年7クラスです。大阪府の将来の方針としては、1学年6クラス18学級が、どうも標準のようにされるということですが、岸和田市においては7クラスで、商業においては4クラスで検討していくということによろしいでしょうか。

【樋口教育長】

府では中野委員がおっしゃったようにクラス数を縮減というようなことを変えているようですけれども、産業高等学校は今の学科等の考え方でやっていただいておりますので、できるだけ中学校の卒業生に魅力ある学校になって来ていただくという議論ですので、クラス数は現状として考えていただければと思います。

【藤田議長】

規模等は維持するという方向の議論でお願いしたいと思います。では他にご意見、ご質問等ございませんでしょうか。

【北野委員】

全く関係ない話ですけれども、ここは授業参観というのはないのでしょうか。先週、佐野高校に行っている子のお母さんから、授業参観があったという話を聞いたのですけれども、私はどんな授業を受けているのか見るのが大好きなのですが、小学校の時から子どもの参観日は1回も欠かしたことがないのですが、こんなことをやっているのだというのを見るのが大好きです。ここは特殊な授業をなさっているので興味津々です。デザインシステムはデザインシステムで、商業は商業で、情報は情報で、お母さん方が見る機会があって、それで近所の人との話で産業高校こんなことしていたとか、あんなことしていたとか、こんな変わった授業していたということが、口コミで広がるということもあるかもしれないと思います。

【楠戸校長】

従前から本校では、授業参観というのとは取り組んではいないのですが、貴重なご意見として伺っておきます。

【武林委員】

もうちょっと細かく具体的にになったら話をしたいなと思っていたのですが、例えば産高体験プログラムみたいなもので、体験ができるとか授業の日に入らせていただくとか、見させていただくとか、先ほど増谷委員がおっしゃっていたように、3年生だけでなく1年生の中学生にも来ていただいてというようなことも考えていただくと、ただ単なる教育相談というようなことではなく、実際子どもに体験してもらって、見てもらって、やってみよう。こういう学校を考えていかれたらどうかと思っております。

【楠戸校長】

従前から体験入学は今でも夏休みの3日間で実施していますが、検討させていただきます。

【藤田議長】

他にないようでしたら、最後に事務局の方からお願い致します。

(議事(4)意見書・次回開催スケジュールについて説明)

【藤田議長】

以上で本日に予定していた内容は全て終わりました。委員のみなさまのご協力、ありがとうございました。これにて、第3回岸和田市産業教育審議会を閉会といたします。